

名医が選ぶ「がんの名医」50人④

| 専門 | 推薦人 | 名医 | 推薦理由 |
|--------|--|---|---|
| 放射線治療 | がん研有明病院 放射線治療部長 小口正彦 |  秋元哲夫 国立がん研究センター東病院 放射線治療科長 | 放射線生物学を究め、陽子線治療にも詳しい学識者。前立腺、頭頸部がんが専門。 |
| | |  唐澤克之 がん・感染症センター都立 駒込病院 放射線診療科部長 | すべての放射線治療を熟知するスーパードクター。とりわけ膵臓がんの術前照射に長ける。 |
| | |  五味光太郎 諏訪赤十字病院 放射線科部長 | がん研の放射線治療システムを立ち上げた。専門は頭頸部、食道、肺、乳など幅広い。 |
| | |  笹井啓資 順天堂大学医学部附属 順天堂医院 放射線科教授 | バランス感覚に優れ、外科医や内科医とうまくコミュニケーションを取りながら治療。 |
| | |  長谷川正俊 奈良県立医科大学附属病院 放射線治療・核医学科教授 | 患者を治したいという気持ちが強く、疑問があれば夜中でも知り合いの医師に相談する。 |
| 緩和ケアなど | 緩和ケア科部長 NTT東日本関東病院 堀夏樹 |  稲川利光 NTT東日本関東病院 リハビリテーション科部長 | 患者の潜在能力を引き出し、自宅に帰してあげたいという強い思いでリハビリを行う。 |
| | |  勝俣範之 日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科教授 | 抗がん剤の効果とその限界について熟知している。患者の生活について真摯に向き合う。 |
| | |  鈴木央 鈴木内科医院院長 | 緩和ケアの概念がない時代から在宅ホスピス、終末ケアを行ってきた病院の現院長。 |
| | |  林摩耶 NTT東日本関東病院 ペインクリニック科医師 | がんに痛みはつきもの。神経ブロックという治療法で、患者が抱える痛みをケアする。 |
| | 緩和ケア科部長 順天堂大学大学院 分子病理病態学教授 樋野興夫 |  磯部威 島根大学医学部附属病院 呼吸器・化学療法内科教授 | 呼吸器内科を専門としながら、今は腫瘍全般を診ている。がん哲学外来を実施している。 |
| | |  竹川茂 名古屋医療センター 緩和ケア科医長 | もとは外科医だが、現在は緩和ケア科の医長。「精神的な痛み」の緩和に尽力している。 |
| | |  宗本義則 福井県済生会病院 外科主任部長 | 外科医として年間150の大腸がん手術をこなしながら、がん哲学外来も担当している。 |

んなに想定外のこと起きてても、おろおろしているところなど見たことがありません」

手術など治療の方法が見つからないときに、最後に行きつくのが緩和ケアだ。この分野の第一人者、NTT東日本関東病院の堀夏樹氏が語る。

「緩和ケアは、単に治療手段がないから看取るということではないと思います。体力や気力が低下している患者さんの潜在能力を引き出して、『がんが治った気がする』というほど患者さんが元気になり、自宅に戻ることの後押しするのが私たちの仕事なのです。」

その意味で、リハビリはとて大切で、私と同じ病院にいる稲川利光先生は、その道の専門家。リハビリ前は寝たきり状態が続いていた患者さんが歩けるようになった事例もありました。

「がん哲学外来」の開設者として患者の心の問題

に取り組んできた順天堂大学の樋野興夫教授は、「医者には二つの使命がある」と語る。

「最先端の医療を学んで病気を直接治療することと、人間的責任で患者さんに手を差し伸べるということの二点です。島根大学の磯部威先生や福井県済生会病院の宗本義則先生は、それぞれの専門分野に秀でながらも、『がん哲学外来』の考えを取り入れて、患者と親身の対話ができる医師たちですね。」

これまでの医者が患者を診る態度は「馬の上から花を眺める」ようなものでした。これからは馬から降りて、患者と同じ目線に立てる医者が求められると思います」

がんとの戦いに勝つために、最も重要なのは一緒に戦ってくれるパートナー。名医たちが医者を選ぶ基準は、もちろんすべての患者に当てはまるものだ。